

<籠神社 2>

2009年4月30日に、籠神社を再訪することができた。今回の目的は、今までにまとめた一連の資料を持参し、受け取ってもらうことである。

前日にインターネットで丹後地方の情報を確認すると、籠神社神幸2500年紀の行事の一環として、丹後郷土資料館にて国宝「海部氏系図」が特別公開されていることを知った。その他の至宝も合わせて、21年ぶりの特別公開である。会期は4月21日～5月31日（国宝は5月20日まで）であり、“お導き”としか言いようがない。

天橋立駅からフェリーで対岸に渡り、係りの人に聞くと、タクシーやバスはほとんど走っておらず、徒歩だと20～30分ぐらいかかるという。そこで、レンタル自転車（¥400）で行くことにし、15分程度で到着した。

確かに、肝心の系図を拝観することができたものの、縦に長い系図を横置きにしてあるので、見にくいこと。また、すべてを広げてあるわけではないので、全景を見られるわけではなかった。そこで、館内で参考資料を探したが、そのような類のものは置いていなかった。展示品で気付いた点を記す。

・系図(1)

籠神社の本来の主神は豊受大神である。亦名が天照大神であることが系図にも記載されていた。

・系図(2)

現在、主神として祀られている彦火明命の後は市杵嶋姫（イチキシマヒメ）命であるが、秘伝の1つに依ると亦名が天照大神となっていた。市杵嶋姫命とは、天照大神とスサノオが天真名井（あめのまない）で行った誓約の際に、スサノオの十握剣（とつかのつるぎ）から生まれた5男3女神の中の一柱である。3女神を宗像三女神と言う。宗像大社（福岡県宗像市）の辺津宮に祀られており、辺津宮の御祭神である。つまり、市杵嶋姫命の亦名が天照大神ということは「多次元同時存在の法則」である。「多次元同時存在の法則」については飛鳥氏が海部宮司から直接聞き出したものかと思っていたが、社務所で購入した「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図」（元伊勢籠神社社務所発行）にもはっきりと記載されていた。

なお、市杵嶋姫の誕生については、日本書紀でもいろいろな説がある。本文では、十握剣から田心姫（タゴリヒメ）命→湍津姫（タギツヒメ）命→市杵嶋姫命の順に誕生している。一書では瑞八坂瓊之曲玉（みつのやさかにのまがたま）から市杵嶋姫命→田心姫命→湍津姫命の順に誕生しており、更に一書では十握剣、九握剣、八握剣から瀛津嶋姫（オキツシマヒメ）命（市杵嶋姫命）→湍津姫命→田霧姫命（田心姫命）の順に誕生している。

なお、「イチキシマ」は「斎き島」に通じ、神に斎く島の女性（女神）という意味になる。巖島神社（広島県廿日市市）の祭神ともなっており、「イツクシマ」という社名も「イチキシマ」が転じたものとされている。また、弁財天の和名が市杵嶋姫である。弁財天はブラフマーの妃サラスヴァティーで、女神の中の

女神である。

・丹生（にゅう）姫命

丹生姫命という聞き慣れない神の名が記されている資料があった。それに依ると、丹生姫命は天照大神の妹となっている。丹生とは不老不死の妙薬のことである。つまり、天照大神は“復活”する“永遠の命”だから、それを丹生姫命で象徴しているのである。なお、丹生は酸化水銀であることが判明している。過去、多くの権力者が不老不死の妙薬を追い求めたが、水銀中毒で死亡した例も多々見受けられるのは、そのためである。また、日本で丹生と言えば、東大寺の“お水取り”が最も有名である。

お水取りは、正式には“修二会のお香水汲み”と言う。“お香水”は、若狭にある鵜の瀬から10日間かけて奈良東大寺二月堂の若狭井に届くと言われている。若狭にある遠敷（おにゅう）川を遡った白石神社で、毎年3月2日に“お水送り”がある。遠敷川上流の白石神社のお水送りは、神社から更に上流の下根来の山八神事から始まる。赤土（丹生の象徴）を神酒で練り、祈禱する。禰宜が柱に山（「生命の樹」）八（救世主）の字を書き、参列者は順に頭に水を振り掛け、饌米を食べ、赤土を舐め、神酒を口にする。そして参列者は赤土を半紙に着けて持ち帰り、棒にさして四畑に立てる。

夕方、白石神社のある神宮寺で、衣冠束帯姿の僧と神職が手桶の香水を神火で清める行を行う。護摩火が焚かれ、修験者や観客が何百人も松明を持ち、鵜の瀬まで行列していき、そこでお香水を遠敷川に流して大和国へ“お水送り”する。このお香水は、若狭の真南に位置する東大寺二月堂の若狭井に湧き出すと言われ、3月13日の修二会に“お水取り”される。

(<http://www.ne.jp/asahi/hon/bando-1000/dust/tan/tan-12.htm> 参照。)

修二会では、道明かりとして大きな松明が焚かれる。修二会は、正式には十一面悔過（けか）と言ひ、十一面観音を本尊とし、天下泰平、五穀豊穰などを願って祈りを捧げ、人々に代わって懺悔する行である。

(<http://www.todaiji.or.jp/index/hoyo/syunie-open.html> 参照。)

十一面観音は、隠されたセフィラであるダアトも含めた「生命の樹」である。それに懺悔するためにお香水が必要となるのであれば、お香水は「生命の樹」に注がれる「生命の水」に他ならない。（シュメールの粘土板には、鷲の姿をした者たちが「生命の樹」に「生命の水」を注いでいる図が残されている。）つまり、遠敷川は丹生の川、生命の水の象徴であり、若狭は“永遠の若さ”を象徴している。“永遠の若さ”は“福”に他ならないから、“永遠の若さ”を与える生命の水の湧く井戸、ということで“福井”となる。白石神社の白石は<聖書について>で述べたように、ベルガモンの教会宛にある“勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほか、誰も知らない新しい名が書いてある”という白石のことで、神宮のお白石のことである。だからこそ、白石神社は神宮寺にある。3月13日の13はイエスと12人の使徒の象徴であり、大きな松明は、シュメールで「神々」を空から迎える際、篝火を焚いて迎えたことに由来する。

・息津（おきつ）鏡と辺津（へつ）鏡

籠神社歴代の宮司が手渡しで伝えている秘宝である。資料館にはその写しが展示されていた。息津鏡は直径 175mm で後漢時代のもの、辺津鏡は直径 95mm で前漢時代のものである。これらは天祖の御神宝であり、籠神社主神の火明命が授けられたと伝えられるものである。

しかし、前述のように、宗像大社に祀られる三神の内、市杵嶋姫命は辺津宮に祀られており、一書には市杵嶋姫命＝瀛津嶋姫とある。そうすると辺津＝息津となる。また、秘宝となるほどの鏡と言えは八咫鏡であるが、八咫鏡は天孫降臨の際、天下る番能邇邇芸命に天照大神が自分の魂だと思って大事に祀れ、と宣託して渡された御神器である。つまり、八咫鏡は天照大神の分身に相当し、市杵嶋姫命は天照大神の娘だから、これも分身と見なすことができる。よって、辺津＝息津＝市杵嶋姫命＝天照大神＝八咫鏡となり、息津鏡と辺津鏡こそが八咫鏡の原型であることが解る。

では何故、2 枚の鏡となるのか？それは、八咫鏡がモーゼの十戒のレプリカであり、十戒石板は 2 枚で、「合わせ鏡」となるからである。そのため、実際の鏡として八咫鏡の原型となったものも 2 枚ということになり、息津鏡と辺津鏡で「合わせ鏡」を象徴しているのである。「合わせ鏡」の中の像は無限に続くような錯覚を引き起こすが、これは“永遠”をも象徴している。

なお、5 月 13 日だけ本物が展示される、と後で神職の方が極秘情報として教えてくれた。

さて、いよいよ今回の本題、まとめた資料を置いてくるのである。しかし、社務所に神職はおらず、巫女だけ。ならば、先に奥の宮を参拝してから、と思い、参拝後、奥の宮で例の石碑（豊受大神 亦名天御中主神 亦名天照大神と裏に記載されている）を写真に収めた。



磐座正面には向かって左に天照大神小宮靈時の碑、右に天御中主大神靈時の

碑があるが、一番左の写真は天御中主大神靈時の碑を正面から見たものである。真ん中はそれを裏から見たものであり、そこの左側の列に「豊受大神 亦名天御中主神 亦名天照大神」と記されている。

一番右は平成 8 年 8 月 8 日に宮司が読まれた歌が書かれている波せき地蔵の立て札である。〈籠神社〉でも述べたように、次のような歌が書かれている。

二千五百年（ふたちいほ） 鎮まる神の神はかり
百（もも）の御生れの 時ぞ近づく （平成 8 年 8 月 8 日）

これは、次のような解釈であった。

“皇紀にして 2500 年以上が経過したが、御鎮座される神様の御計画通り、いよいよ天照大神が御降臨される時が近い。”

また、キリスト教に於いて 8 は“復活”を意味し、ギリシャ語で“キリスト”と書くと、数秘的な数値は“888”となり、“平成 8 年 8 月 8 日”により、御生れされる神＝御降臨される天照大神がイエスであることを暗示している。

閑話休題。奥の宮の参拝後、本殿に戻ってみても、やはり巫女しかいなかった。やむを得ないので、意を決して話した。昨年同時期に来た時、名古屋出身の神職の方と飛鳥さんの本のことやシュメールについてお話しさせて頂き、本日はそれをまとめた資料を持参した、と。こちらとしては、巫女にそんなことを話しても、受け付けてさえもらえないだろう、と思っていた。が、にっこりと微笑み、ああ、そうですか、ということで、話が通じたのである！何という神社だ！ここには変わった人（ユダヤと日本の関係や天照大神について詮索する人）が多く参拝するから、おそらく何時、どんな人が来たのか記録しているのだろう。その神職の方は寺田さんといい、4 月から千葉の方へ行かれたとのこと。こちらとしては彼に渡すわけではなく、皆様御一同と宮司様で読んで頂ければ、ということで無事、手渡すことができた。

社務所で販売されている書籍を見て購入し、帰ろうとすると、何と、巫女さんが宮司様（海部光彦氏）を呼んで来られた！そこで、聞かれるがままにお答えした。まずは資料の目的、シュメールの重要性、三笠宮殿下のメソポタミア関連著書等について申し上げ、そのきっかけとなったのは、宮司様とキリスト教徒の皆川氏との対談でシュメールが重要であり、それからシュメールについて詳しく調べ直した旨を申し上げた。そして、40 分ほども立ち話でお話しできたのである！シュメールの重要性を強調したことが功を奏したようである。以下、その対談の主な内容を記す。こちらとしては宮司様とお話しできただけでも恐縮なので、聞かれたこと以外、一方的にお話しを伺う姿勢に徹した。当然、飛鳥氏の話はしてあるから、その内容は知っている前提の下である。

・シュメールは特に重要で、古代世界の歴史・神話・宗教を知らずして真相解明はほど遠い。

・日本に於けるシュメール研究の先駆けとなったのは、愛媛県の一宮である大山祇（おおやまづみ）神社の三島敦雄氏である。氏は、昭和2年12月に発行した「天孫人種六千年史の研究」で日本人シュメール起源説を論じており、おそらく国内初のシュメール詳細研究である。現在は絶版であるが、わざわざ実物を見せて頂いた。なお、大山祇神社の御祭神は大山積大神であり、天照大神の兄神で山の神々の親神にあたり、番能邇邇芸命の皇妃となられた木花開耶姫（コノハナサクヤヒメ）命の父神にあたる日本民族の祖神である。

・四国の讃岐は重要である。阿波忌部氏である三木氏がいる。

・ユダヤと日本の関係について論じている者は多くいるが、宇野正美氏は勝手な解釈で間違っている。しかし、神社側としては反論することはできない。ユダヤ教ラビのマービン・トケイヤー氏はかなり研究されているが、ラビという立場上、ユダヤ教に固執しすぎである。また、飛鳥氏はマズマズのレベルであるが、彼もシュメールを研究していないので、駄目である。この前も、飛鳥氏が来た模様である。彼のホームページを見ると、物部氏の秘密を探りに行ったらしい。

(<http://askado.web.infoseek.co.jp/column/framecolumn.html>)

そこでは、飛鳥氏の情報が物部氏の本質に迫る情報のため、海部宮司が逃げ腰になった、とあるが、そうではないだろう。シュメールのことまで調べない飛鳥氏に対する宮司様の姿勢なのである。なお、そのページには、籠神社の裏社紋が六芒星であることを飛鳥氏が公開した直後、六芒星が刻まれた伊勢神宮の参道に林立する石灯籠も一斉撤去が始まったとあるが、現在でもそれらの石灯籠は林立している。

・尾張氏はヤマトにいたが、神武＝応神天皇＝秦氏に追われ、美濃を通過して尾張に辿り着いた。なお、海部（かいふ）氏は、海部（あまべ）氏とはほとんど関係無い。

・籠神社では日の神（天照大神）と共に月神（豊受大神）を祀っているが、シュメールでは日の神はウツ、月神＝水神はヤーと言っており、道理に合っている。また、ウツはヤーの息子である。

様々な文献等を紹介して頂き、飛鳥氏の本なども取り出して見せてくれたが、赤線が多く引いてあったりした。ただし、最後のウツとヤーの関係については、話され方からして本質を隠している様子ではなかったが、これは明らかにバビロニア神話を基にした誤りである。そうすると、この方たちはどこまで真相をご存じなのだろうか？

いずれにしろ、宮司様と名刺を交換することまでできたので（何という幸運！宮司様から名刺交換を申し出られた）、以降は電話すれば話が通じるようになった。さあ、今後はどうなるだろうか？

初版：2009年5月
改定：2012年12月